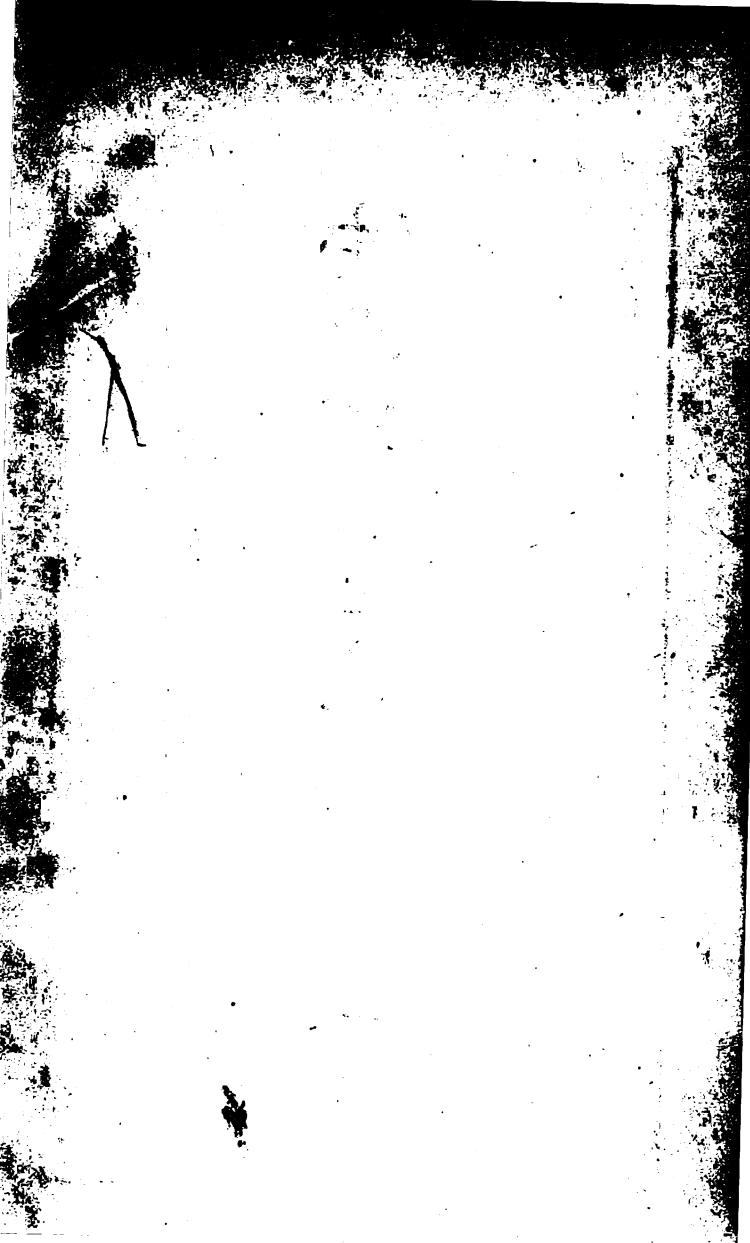


淨瑠璃名集

上



緒言

享保八年竹田出雲松田和吉兩名にて、「大塔宮曦鎧」を出しよを淨瑠璃合作の初めとして、後は五人三人、多きは六七人の手に成れるさへ珍しからず、各一場々々を受け持ち、趣向文作に奇を凝らし新を盡して相競ひしかば、場ごとに目を驚かし耳を聳つる事多く、言はば汁も膾も鯛づくめ、椀にも皿にも五種七種の馳走の數々盛り附けたる如くなれば、おのづから箸つけらるよは仕出し勝れし一二種に止るべきわざなり。是れ拔本と稱して今も床にて語るよ一段物の流行を促したる主因にして、蓋し連歌の一句より發句の發達せると同日の談なるべし。

拔本即ち一段淨瑠璃は、斯く一部ながらに全體の趣向を縮めたるが如き、充實せる内容を有するものなれども、全鼎を試みざれば猶飽かざるの憾なしとせず。本書收むる所は即ち其の全本にして、從來世に行はるよ語物のうち、最も著名なるもの二十一種を選択し、之を三卷に別ちて各七篇を收めたり。

底本は何れも流布の丸本に據り、努めて原形を存するに注意したれども、假名がちに讀みにくき所々は、適宜に漢字を當て、句讀を施し、用字・送假名・假名遣等も、特色あるものの外は總て正しきに從ひて改めつ。詞には一々鈎符を附し、稀には發言者の頭字を註し置ける所もあり。由來淨瑠璃の文を讀むに難儀とする所は、多く會話相互の關係と詞章の區別分明ならざる點に在り。或は甲語中に乙言を藏し、一人にして數人に言ひかけ、數人にして一口に發し、自他尊卑の言語縱横徂徠する事電光石火の如く、或は地の中に詞を孕み、詞直ぐに地に句ひて圓融無碍の妙を極むるさま、唯水月鏡花の別ち難きに異ならず。之れ校訂者の最も苦心を要したる所なり。

毎篇の解題を一々詳述せんも煩はしければ、左に其の年代と作者とを列記し、必要の事項のみを其條下に附言するに止むる事とはなしつ。

一 苧萱桑門筑紫轡(享保二十年) 並木宗輔、同丈輔作

字治加賀掾の正本に「刈萱道心物語」あり、關係あるべし。

宗輔通稱は松屋宗助、初め田中千柳といふ、西澤一鳳門人也。延享年中出雲松洛等と共に竹本座に筆を執り、享保以降は豊竹座に專屬し、海音出雲文耕堂と共に當時の四天王と稱せらる、寛延二年五十七歳にて歿す。

一三十三問室
平太郎縁起祇園女御九重錦(寶曆十年) 若竹笛躬、中邑阿契作

竹本座座本竹田近江驕奢の咎にて入牢せし後、一頓挫を來し、同座の人氣を、一時此作にて挽回せりと傳ふる當り作なり。

笛躬はもと若竹藤九郎といひし人形遣、阿契は初め中村閨助といへり。

一奥州安達原(寶曆十二年) 近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衛作

半二は大阪の儒醫穂積以貫の子、出雲の門人、竹本座振興の功勞者なり。巢林子に私淑し、翁の愛硯を藏するに因りて近松氏を稱すといふ。晩年山科に閑居し、天明三年五十九歳にて歿す。

一武田信玄
長尾謙信本朝廿四孝(明和三年) 近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出雲、竹田平七、

竹本三郎兵衛作

當時竹本座の衰運を回復せんが爲、東西兩座の太夫を交換するなど、苦心慘愴の計畫も其効なかりしを、此作一たび出でて大當りを占め、四段目に引割御殿のせり上げなどを工夫して見物を喜ばせたりといふ、竹本座掉尾の傑作なり。

一染久松新版歌祭文(安永九年) 近松半二作

延寶七年九月廿九日大阪東堀なる油屋の丁稚久松といふ者、主人の娘お染といへる二歳の小兒を負ひて守するうち、過つて川に落し死に至らしめたるを悔い、折檻の爲に罩められし土藏の裡にて縊死せる事實を仕組めるなり。此事實を仕組めるもの、正徳元年に紀海音作「油屋お染袂の白絞」、明和四年に菅專助作「染摸様妹脊門松」あり、共に此作と青藍の關係あるもの也。

一御陣九州
地理八道彦山權現誓助劔(天明六年) 梅下風、近松保藏作

鎮西御軍記といへる寫本に、毛谷村六助吉岡の娘に助太刀して京極内匠を討たする事あ

るを潤色せしものにして、竹本座にて妹脊山以來の當り作なり。

一増補 生寫朝顔話(嘉永二年) 翠松園主人校補

文政年間、山田案山子といふ人、竹本重太夫の爲に創作し、完結せずして歿したるを、彼の翠松園主人の舊章に據りて刪補潤色したるもの、もと「生寫朝顔日記」といへりしが、六字の外題は佛號に通へりとして、其の通の忌む事なれば、今の名の七字に改めたる由奥書に見えたり。

大正三年十一月

校訂者 松山米太郎

一、緒言
 二、第一章
 三、第二章
 四、第三章
 五、第四章
 六、第五章
 七、第六章
 八、第七章
 九、第八章
 十、第九章
 十一、第十章
 十二、第十一章
 十三、第十二章
 十四、第十三章
 十五、第十四章
 十六、第十五章
 十七、第十六章
 十八、第十七章
 十九、第十八章
 二十、第十九章
 二十一、第二十章
 二十二、第二十一章
 二十三、第二十二章
 二十四、第二十三章
 二十五、第二十四章
 二十六、第二十五章
 二十七、第二十六章
 二十八、第二十七章
 二十九、第二十八章
 三十、第二十九章
 三十一、第三十章
 三十二、第三十一章
 三十三、第三十二章
 三十四、第三十三章
 三十五、第三十四章
 三十六、第三十五章
 三十七、第三十六章
 三十八、第三十七章
 三十九、第三十八章
 四十、第三十九章
 四十一、第四十章
 四十二、第四十一章
 四十三、第四十二章
 四十四、第四十三章
 四十五、第四十四章
 四十六、第四十五章
 四十七、第四十六章
 四十八、第四十七章
 四十九、第四十八章
 五十、第四十九章
 五十一、第五十章
 五十二、第五十一章
 五十三、第五十二章
 五十四、第五十三章
 五十五、第五十四章
 五十六、第五十五章
 五十七、第五十六章
 五十八、第五十七章
 五十九、第五十八章
 六十、第五十九章
 六十一、第六十章
 六十二、第六十一章
 六十三、第六十二章
 六十四、第六十三章
 六十五、第六十四章
 六十六、第六十五章
 六十七、第六十六章
 六十八、第六十七章
 六十九、第六十八章
 七十、第六十九章
 七十一、第七十章
 七十二、第七十一章
 七十三、第七十二章
 七十四、第七十三章
 七十五、第七十四章
 七十六、第七十五章
 七十七、第七十六章
 七十八、第七十七章
 七十九、第七十八章
 八十、第七十九章
 八十一、第八十章
 八十二、第八十一章
 八十三、第八十二章
 八十四、第八十三章
 八十五、第八十四章
 八十六、第八十五章
 八十七、第八十六章
 八十八、第八十七章
 八十九、第八十八章
 九十、第八十九章
 九十一、第九十章
 九十二、第九十一章
 九十三、第九十二章
 九十四、第九十三章
 九十五、第九十四章
 九十六、第九十五章
 九十七、第九十六章
 九十八、第九十七章
 九十九、第九十八章
 一百、第九十九章
 一百零一、第一百章

淨瑠璃名作集 上 目錄

苜荳桑門筑紫轡

一—六

第一	一
第二	三
第三	元
第四	道行越後獅子	兎
第五	六
三十三間堂 祇園女御九重錦		
平太郎緣起		
發端	七
第一	八
第二	一〇〇
第三	一三五

七—一六

奥州安達原

一七—二六

第四	道行親子の友衛	二五
第五	一八〇
第一	一七
第二	二〇八
第三	二三八
第四	道行千里の岩田帶	二五三
第五	二七五
武田信玄 本朝二十四孝		
長尾謙信		
第一	二七九
第二	二九八
第三	三〇〇
第四	道行似合の女夫丸	三〇六
第五	三七五

二七—三六

お染
久松新版歌祭文

三七九—四三八

座摩社の段……………三七九

野崎村の段……………三九一

長町の段……………四二〇

油屋の段……………四二八

御陣九州
地理八道 彦山権現誓助劔

四三九—五五六

第一……………四三九

第二……………四四五

第三……………四五〇

第四……………四七二

第五……………四七九

第六……………四九七

第七……………五〇六

第八……………五一八

増補
生寫朝顔話

五五七—六五六

第九……………五二六

第十……………五四〇

第十一……………五五二

大内館の段……………五五七

松原の段……………五六一

宇治の段……………五六二

眞葛が原の段……………五六九

岡崎の段……………五七二

明石船別れの段……………五八〇

弓之助家舗の段……………五八三

大磯揚屋の段……………五九一

小瀬川の段……………六〇四

摩耶が嶽の段……………六〇九

摩耶が嶽の段 三段目の切……………六一四

濱松の段	六五
宿屋の段口	六三
宿屋の段	六八
歸り咲吾妻の路草	六九
駒澤上屋鋪の段	六一

目
錄